

となりの CADユーザー調書 No.15

このコーナーでは毎回、CADを存分に活用しているユーザーを取り調べ、なぜハイユーザーなのか、どのようにしてノウハウを得たのかを徹底的に解明します。



信念：人と同じことをしない

【ユーザー名】
小林義宗

小林建築設計事務所代表。ゼネコン勤務後、19年独立。企画・設計のほか、CADコンサルティング、設計プログラム制作などを手掛ける。2000年、ゼネコン勤務時代の同期4名とコラボレーション・セッション「Archi・Core」を設立。E-MailやNetMeetingを用いて情報交換や業務連携を行っている。

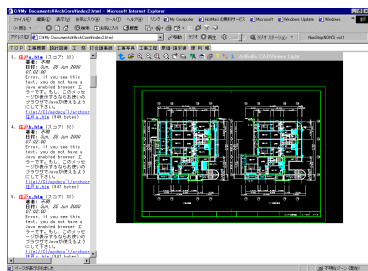
URL <http://www.geocities.co.jp/SiliconValley/2345/>

【現在使用しているソフト】

JW_CAD、DRA-CAD、AutoCADなど

【使用環境】

自作パソコンを多数使用（AMD K6- 350MHzなど）



「Archi・Core」で開発を進めている「ArchiCore-System」。最近の建設CALSの動向と実務レベルでの経験を生かしたコラボレーション・ツールである。全文検索方式による図面検索機能を備える

CAD時代の到来を見据え、タイプライターでタイピング練習

小林義宗氏が大学を卒業後就職した時期と、ゼネコン全般がCADシステムへの先行投資を始めた時期は符合するという。1981年の日影規制を契機に、コンピュータが業務に用いられ、注目を集める。やや遅れてゼネコンを嚆矢としてCADが建築設計分野に導入され始めた。勤務先でも大型のオフィスコンピュータで動作する富士通のBLDシリーズ

が導入される。小林氏は東京支店のCAD推進部のチーフとしていち早くCADによる設計業務に携わる。「いずれコンピュータが業務に不可欠のツールになるであろうことは予想していたため、コンピュータやCADの動向には気を配っていた。ポケットコンピュータを購入してBASICを独習。キーの配列は手動タイプライターで練習した。」

CADは憧れの対象、魔法の道具

単純作業は性に合わないという。「もっと楽にできないか」「人は異なるうまい方法はないか」とまず考える。「手書きの頃も、ハッチングを書き入れながら『なぜこんな単調な作業をしなければならないのか』と思っていた」。BLDでのハッチング処理は一瞬。加えて平面、立面を入力するとパス

も作成でき、角度を変えながら鳥瞰図を作成することも簡単だった。「現在のパソコンCADが華々しくうたう機能の多くはすでに実現していた。ウォークスルーこそできなかったが、ちょっとした工夫でそれに近いことも可能にした。当時、CADは憧れであり、魔法の道具だった。」

パソコンCADと住宅事情の密接な関係!?

11年勤務した後、パソコンとDRA-CADを元手に独立。まだまだ高価だったパソコンと登場したばかりのパソコンCADを購入した背景には住宅事情がある。「仕事先を自宅に移して最初にぶちあたったのがスペースの問題。まず図面入りが部屋に

入らない。製図台、大きなコンパス、定規、すべてが障害になった。パソコンなら文房具も必要ない。作成した図面は図面入れではなくフロッピーに保存すれば済む。モニタの中で製図作業が完結してしまうのが何よりも魅力だった。

初めて手掛けたマンション平面詳細図に泣く

独立後初めて受注した仕事はマンション1棟分の平面詳細図作成だった。「1日16～17時間やっても、1週間かけて1枚書けない。期限はとうに過ぎ、催促の電話はかかってくる。モニタに手をつっ込んで書きたかったくらいいもどかしい。『手書きならと

うに終わっているのに』そう思うと泣きくなった。しかし、その経験が確実に現在の血肉になっていると感じる。「自信というような抽象的なものではなく、1棟分丸ごと手掛けたことで以後の図面の使い回しの核、データベースの元になった。」

オリジナルの部品集作成は時間と労力の無駄

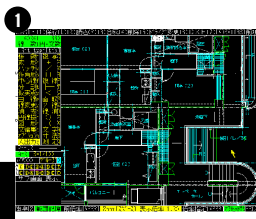
部品集は作成しない。「図面からパーツを抜き出し、整理してオリジナルの部品集を作成するユーザーも多いが、時間と労力の無駄。手掛けた物件のどこに何かがあったか、どんな収まりがあった

かは覚えているはず。物件としての記憶があればわざわざ分ける必要はないし、逆に周りのディテールからヒントを得ることもある。多人数ならともかく少人数なら覚えていないほうがいい。」

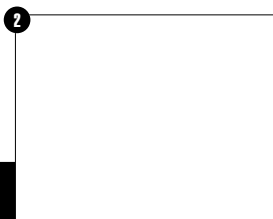
CADの“D”はDesignの“D”。設計支援を打ち出したツールを開発中

CADの利用の度合いは高まってはいるが、本来、「Computer Aided Design」であるはずのCADが、「Computer Aided Drafting」であるかのように理解され、利用されがちな風潮には抵抗を感じている。「CADを清書の道具に限定するのは狭小な考え方

と思う。CAD化のメリット、デジタルデータの特性を最大限に生かすべく、コラボレーションツール「ArchiCore-System」の開発をゼネコン勤務時代の友人らと手掛け、この秋には実際に大手設計事務所でも稼働実験を行うという。



1 独立後、初めて手掛けたマンションの詳細図。表計算ソフトで展開図を作図。2分程度のセルへの数値入力作業で、A2判4室分の展開図の下絵が完成する



3 (DXFファイルに変換) 15分でどこまで作成できるかスタディとして挑戦したCG。小林建築設計事務所のWebサイト。住宅相談室、コラムなどを掲載

